

# Gaskell と Brontë の「友情」を読む

## ふたりの書簡から

長瀬久子

はじめに

*The Life of Charlotte Brontë* (以下 *Life*) は、「環境の犠牲者」である Brontë 像を造形し、「悲劇の聖女 Brontë」という伝説を生む原因となった。この作品は、死後の中傷から友人を救済することを目的とした、Gaskell の友情の結実として長い間称賛されたが、フェミニズムの興隆以後の Brontë 再評価のなかで、悲劇的 Brontë 像の作者への評価は一転した。Juliet Barker や Barbara Whitehead らには 'gossipmonger' と貶められ、伝記の材料収集の方法にいたるまで彼女は 'scandalmonger' (Barker, p.792) 'treason' (Barker, pp. 777-808) と罵倒された。ただ、*Life* の作者への毀誉褒貶のどちらの場合にも、評者の注目は彼女の善意や「悪意」に集中しがちで、彼女がひとつの作品を書く芸術家である点は忘れられがちである。

しかし Gaskell に悲劇的 Brontë 像を書かせたものは、ゴシップ好きよりも友情よりも、Brontë を物語のヒロインとして把握し表現しようとする、友情よりも旺盛な小説家魂であったように筆者には感じられる。ふたりの交友は深い理解に基づく麗しい友情に終始したわけではなく、特にその初期には Gaskell の思い込みと Brontë の感情との間にかなりの齟齬があったことを、Margaret Smith 編の Brontë 書簡集から読み取ることができる。本稿では Gaskell と Brontë の書簡を読みくらべ、ふたりの交友の特に初期について、Gaskell は Brontë をどう見たか、Brontë は Gaskell をどう見たかを検証したい。ふたりの文通のうち Gaskell の書簡は現存しないので、彼女がどのように Brontë に語りかけたかは分らないが、他の友人たちに宛てた書簡には Brontë についての所見が詳しく記されており、Brontë についての彼女の見方を知る手がかりは多い。

「悲劇のヒロイン Charlotte」というイメージは、*Life*の執筆計画が具体化するなかで固まったものではない。GaskellはBrontëを最初からそのような存在として捉えたのである。GaskellとBrontëが深く理解し合うためには、ふたりの交友はあまりに短い。交友期間は1850年から55年までの4年7ヶ月に過ぎず、対面したのは合計20日間のみである。Brontë書簡集にはGaskell宛の書簡が、断片や疑わしいものも含めて約40通掲載されており、Gaskellも同数程度は書いたと思われるが、実際限られた短い交友である。もっとも出会う前から互いの作品に関心を持ち合い、書簡も交わしてはいた。GaskellはBrontëの作品には否定的な反応(*The Letters of Mrs Gaskell*, p.57, p.116.以下GL)を示す一方で、その作者には強い興味と同情を感じた。Smith-Elder社を通じてCurren Bellから*Shirley*を献呈されると、その作者の正体に野次馬的ともいえる好奇心を燃やす(GL, p. 90)一方で、作者が孤独な女性であることを直感して同情に満ちた手紙を送った(Barker, p.614)。この手紙は現存しないようだが、Brontëの礼状の‘Curren Bell must answer Mrs. Gaskell’s letter...and She must acknowledge its kind, generous sympathy...Yet Mrs Gaskell must not pity Curren Bell too much...she has one near relative still left, and therefore cannot be said to be quite alone (*The Letters of Charlotte Brontë*, Vol. II, p. 288. 以下BL II)’という文面から、Brontëを多少たじろがせるほど彼女の孤独に対する同情を表明する内容だったことが分る。

Gaskellが抱いた「孤独なBrontë」のイメージは、のちにふたりの小説家を別荘に招待して出会いの機会を作るLady Kay-Shuttleworthとの文通を通じて、Brontëへの強い先入観として定着したらしい。Gaskellは49年末頃にMrs. Davenportの邸宅Capethornに滞在中に夫人と面識を得て(GL, p. 91, p.116)以後親しい文通相手となった。翌50年3月にKay-Shuttleworth夫妻がBrontëと交際を始めると、夫人はBrontëについて好奇心に燃えるGaskellの恰好の情報源となった。5月14日付の夫人宛の手紙からは、当時ふたりの話題がBrontëに、それも彼女の「同情すべき状況」に集中していたらしいことが読み取れる。夫人は、GaskellならBrontëのためになれると示唆したらしい。Gaskellの‘...I should like to hear a great deal more about her [Brontë], as I have been so much

interested in what she has written. I don't mean merely in the story and mode of narration... but in the glimpses one gets of her, and her modes of thought, and all unconsciously to herself, *of the way in wh she has suffered. I wonder if she suffers now* ( GL, p.116, italics mine )という文面から、Gaskellの興味が現実のBrontëではなく、夫人が語ったと推測される「苦しむBrontë」にあり、彼女の想像裡にすでに悲劇のヒロインが芽生えていることが分る。極論すれば*Life*のプロットはこのとき決まったのである。Gaskellの書簡でBrontëに関する最初の詳しい記述は、*Shirley*の著者がHarriet Martineauを訪問したことを報ずる49年12月の手紙( GL, p. 96 )だが、そこに見られる'full of life and power', 'the little sprite...red all over with pleasure'などのBrontëに関する表現には、悲劇や苦しみを想わせるものではなく、「苦しむBrontë」のイメージ形成に夫人の影響が大きいことは間違いなさそうである。

1850年8月20日から3日間、GaskellはKay-Shuttleworth夫妻の別荘Briery Closeで初対面のBrontëと3日間過ごし、帰宅直後の25日に'If I don't write now I shall never' ( GL, p. 123 )と意気込んで、Brontëについての詳細をCatherine Winkworthに知らせている。この書簡はBrontëと出会う以前にGaskellの想像裡に悲劇のヒロイン像ができ上がっていたことを物語るものである。同時に、彼女がBarkerやWhiteheadが酷評するようにゴシップを垂れ流すのではなく、おそらく無意識にはあるが、この時点でBrontëについてひとつの物語を完成させて読者(この場合にはひとりないし数人の友人だが)に提供していることもこの書簡から読み取ることができる。

... She [Brontë] is( as she calls herself ) *undeveloped* ; thin and more than 1/2 a head shorter than I, soft brown hair not so dark as mine; eyes (very good and expressive looking straight & open at you) of the same colour, a reddish face; large mouth & many teeth gone; altogether *plain*; the forehead square, broad, and *rather* overhanging. She has a very sweet voice, rather hesitates in choosing her expressions, but when chosen they seem without an effort, *admirable* and *just* befitting the occasion. There is nothing overstrained but perfectly simple. ( GL, pp.124-25 )

友情や個人的好意は見あたらない。小説の冒頭でヒロインを簡潔に導入する小説家の描写である。Brontëの外見を具体的に描写し、次にまっすぐな視線と慎重に選んだ非凡な言葉と優しい声という表現で彼女の内面を示唆する。Brontëとの出会いで、まず刺激を受けたものはGaskellの友情ではなく、小説家の表現意欲だったらしい。

ヒロインの導入には、その生い立ちと家庭の描写が続く。素材はGaskellが過去数ヶ月間にLady Kay-Shuttleworthから仕入れたゴシップである。

...Such a life as Miss B's I never heard of before Lady K S described her home to me as in a village of *a few grey stone houses perched up on the north side of a bleak moor* looking over sweeps of *bleak moors*. There is a court of turfs & a stone wall, — (*no flowers or shrubs will grow there*) a straight walk, & you come to the parsonage door with a window on each side of it. The parsonage has *never had a touch of paint, or an article of new furniture* for 30 years; never since Miss B's mother died. (italics mine ) (GL, p. 124)

夫人がどのような順序でBrontë家や周辺の風景を語ったかは分らないが、Gaskellは仕入れたゴシップを、この時点ですでにひとつのドラマに完成させている。彼女のペンは果てしないYorkshireの荒野を展望してから、民家が点在する寒村を抜けて牧師館の侘しい中庭の小道へと読者を導き、建物の外観を一瞥し、屋内に入って内装と家具について軽く触れると、家族の歴史へと自然に移る。映画の冒頭のカメラワークにも似た、*Life*の冒頭部分と同じ手法である。ゴシップ特有の無駄な表現はなく、不毛と死をイメージさせる言葉のみを用いて、脳裏のヒロインの悲劇を効果的に演出している。

同じ書簡には、さらに、子供たちを哀れんで泣きながら死ぬBrontë夫人、椅子を鋸で挽き切り、絨毯を暖炉で燃す狂気のような横暴な夫、子供と食事を共にせず、娘に教育をほどこさない頑なな父の挿話が続く。後に*Life*に描かれる強圧的家父長とその犠牲者である家庭の女たちの挿話がすでに完成した形で示されている。Lady Kay-Shuttleworthの領地に近いBarnleyに住む、Brontë家を解

雇された召使から夫人が仕入れた不正確な情報に基づくゴシップを、Gaskell がゴシップにありがちな誇張や誤謬を警戒せず、積極的に鵜呑みにしたらしい気配が文面から感じられる。それは、そこに長く彼女の創作のテーマであった、父権に抑圧される女の苦悩の物語を読み取ったためであろう。この手紙にはGaskell が Briery Close で Brontë 自身から聞いた身の上話も続いているが、その細部 (GL, p. 125) がやはり多少不正確である。Gaskell の注意は、Brontë の話を正確に聞いたり、彼女を客観的に観察する努力でなく、自分の想像のなかに芽生えたヒロイン Charlotte 像を造形するほうに払われていたらしく感じられる。父権の抑圧に耐える孤独な女の物語に Brontë の打ち明け話を投影させながら聞き、悲劇の枠組みに彼女を当てはめるのに忙しかつたのであろう。

## II

書簡のなかで、Brontë が Gaskell に対し、確かな友情を示しているのは、小説家として小説家 Gaskell に対する場合である。ふたりは著書を贈り合い、書物や文学界の人々について意見交換している。しかし、Brontë は自分が知性も経験も優る、より完成された作家であることは確信している。作品を批評し (BL II, p. 560, BL III, p. 116, p. 292)、*Ruth* のプロットについて意見を述べ (BL III, p. 43) 批評に備える心構えを忠告する (BL III, p. 104)。自分では創作に不可欠と考える、孤独に支えられた精神の自由が Gaskell に不足していることを喝破しながら、相手の精神の領域に無遠慮に踏み込むことをせず 'Does no luminous cloud ever come between you and the severe Truth—as you know it in your own secret and clear-seeing Soul?' と問いかける口調は繊細で慎重である (BL III, p. 182)。文学上の先輩らしい自信に裏打ちされた真実味の横溢するこれらの書簡や、彼女が Gaskell のために *Villette* の出版を遅らせた事実から、我々はふたりの交友が真の相互理解に基づく高質で不動のものであったような印象を持ちがちである。しかし、作家としての側面以外となると、Brontë の書簡全体を通じて Gaskell 個人に対する興味は見事に欠落しており、言葉はしばしばよそよそしく、Gaskell の接近をいらだたしげに拒絶することも珍しくない。

1850年にBrontëとの交流が開始した当初、Gaskellの考えるBrontëは横暴な父、抑うつ症 (GL, p. 139) 孤独、極度の貧困 (GL, p. 128) 結核 (GL, p. 126)

の重荷を負う 'poor poor creature' (GL, p.139) であった。Gaskell は Lady Kay-Shuttleworth に 'I long to have her [Brontë] quietly in our family, settled down for a visit; not the bustle of a few days only; ...I wrote her a long letter of almost impertinent advice, (at least it would have been impertinent if it had come simply from the head, and not warm from the heart which ached for her loneliness' (GL, p.139) と、Brontë を家庭の重圧から脱出させ、自宅で静養させるという抱負を語っている。'almost impertinent advice' とは、主として牧師館を脱出するという忠告だったらしいことが、その後の Brontë の書簡から窺われる (BL II, p. 587, p.710)。Gaskell のこの文面には、自分の意図を Brontë はどう感じるか、という意識が見られない。Gaskell にとって、3 日間をともに過ごしたのみの Brontë はまだ生きた人格というよりは、なかば物語中の人物で、作中人物のように自由に動かせるものと錯覚したのであろうか。たしかに、私生活では母と 5 人のきょうだいに次々と死別し、小説家としては瞬時にして国民的注目を独占した、*Jane Eyre* の謎の著者という存在は、あまりにヒロインにお誘え向きで、錯覚しても不思議はない。しかし想像上の受難のヒロインに対する Gaskell の独善的な善意は、自負心の強烈な Brontë には 'impertinent' と映り、不快だったようだ。書簡ではこの頃、彼女は Gaskell の招待を繰り返し謝絶しているが、その一番の原因はおそらく両者のこの意識の齟齬である。この年の冬 Gaskell は Essex にある Shaen 家の別荘に滞在の予定だったが、南部の快適な家庭に Brontë も滞在できるように、Brontë とは面識のない Annie Shaen を説いて招待状を出させた (BL II, pp. 532-33)。この招待を謝絶して Harriet Martineau の招待を優先すると断言する Brontë の語気にはただならぬ剣幕のようなものが感じられる。

This I know, however, very well—that if I could go and be with you...I should like it much ...it is the pleasantest, gentlest, sweetest temptation possible: but—delectable as it is, its solicitations are by no means to be yielded to without the sanction of Reason.... (BL II, p. 533)

それでも Gaskell は同じ目的で矢継ぎばやに彼女を自宅に招待し続けたらし

い。1月22日には Brontë は招待をかわし (‘It is my hope one day to see you [as you kindly say] “under your own roof” but when I cannot tell’ [BL II, p. 561]) 3月中旬には反論して (‘It will not do to get into the habit of running away from home, and thus temporarily evading an oppression, instead of facing’ [BL II, p. 587]) Gaskell の思い通りにならない意思表示をしているが、3月25日にはついに堪忍袋の緒が切れたらしい。この時の招待を謝絶する理由は、旧友の Ellen Nussey が牧師館に滞在中のため、ということだった。

If it [Gaskell’s invitation] had come a week ago, I should just have obeyed its injunctions simply and at once—and gone straight over to Manchester for a few days—; but I have an old friend and schoolfellow staying with me just ‘now’ and I hope she will not leave me for some weeks, so that at present I am bound to home.

You do not know—you cannot tell what a relief is her society; not that she boasts any special superiority of character—but she is at least truly good and kind and we have many quiet subjects of interest in common, and her attention...her very presence give me a sort of new life—a support and repose for which I cannot be too thankful. (BL II, p. 590)

‘obey its injunctions’ という表現からは、Gaskell の招待状が、彼女の意識では「熱い心から出たのでなければ失礼にもなりかね」ない率直のつもり表現を含み、それを Brontë は「失礼千万」と感じたことが窺われる。「旧友には当分滞在してほしいので伺えない。特に取り柄もない人だが自分とは共通の興味があり、いてくれるだけで生き返る。そんなつき合いがどんなにほっとするものか、あなたには分るまい」という文面は、無遠慮に接近する Gaskell に対し、Ellen との親密な関係にことよせて、自分と Gaskell の関係はそうではないと諷しているのである。しかも、この返事が発送される前、Gaskell の招待状はしばらく打ち捨ててあったらしい。招待に返事のない理由が分らなかったのか、「率直」すぎたという自覚があったためか Gaskell は、その解答を求めて直ちに George Smith に問い

合わせた(BL II, p. 592, n.1)。Smith から連絡を受けた Brontë はさすがに多少おかしそうに Gaskell のせっかちと思ひ込みをたしなめている。自分の出版者が介在したことへの配慮もあったろうか。

...I dare not but write to you with as little delay as possible. It must be confessed you have an excellent method of spurring to activity any loitering correspondent. Do you know you prove yourself thereby to be somewhat impulsive and very determined? (BL II, p. 591)

6月にやっと Brontë はロンドンからの帰途、先延ばししていた訪問の約束を果たす。しかし彼女は訪問の目的が Gaskell の計画する静養目的の長い滞在ではないことを、最初にことさらはっきりさせている(‘my coming to see you for a day or two on my way home’ [BL II, p. 638])。またこの訪問について Ellen に書く口吻には、それを特に楽しみにしている様子もない(‘when I have as quickly as possible paid my debts of engagements’ [BL II, p. 643])。この後も彼女は時折 Gaskell に拒絶的な表現を含む手紙を書いているが、それは牧師館脱出を忠告された場合(BL II, p. 710)、私生活を語ることを求められたらしい場合(BL II, p. 708)などであり、「苦しむ Brontë」を想定した Gaskell の接近が続いていたことが推測される。

Brontë が真剣に Gaskell の友情を求めはじめるのは、*Villette* の批評をめぐって Martineau と絶交し、その後 George Smith や W. S. Williams とも疎遠となり、Arthur Nicholls との結婚に反対する Ellen Nussey が去ったあと、結婚問題で Gaskell と意見が一致してからである。友の手紙を待ちわびる孤独を訴え、‘...in short you shall find in this letter everything to stimulate to an immediate answer on your part.’ BL III, p.214)と、切実に Gaskell の友情を求める 53 年 12 月 27 日付の書簡のような表現は、それ以前は見られなかったものである。

現実には接触の少なかった Brontë を、人間よりは物語のヒロインのように感じる意識は Gaskell のなかで後々まで尾を引いていたように思われる。Gaskell が Brontë をそのように意識したことが、*Life* の Charlotte 像を限定しただけでなく、彼女の周囲の人々に対する Gaskell の現実感覚を希薄にし、作品中の

Patrick や Nicholls や Lady Scott の人物造形を極端なものにする一因になったのではないだろうか。小説作法のみを武器に、女の伝記を書く、女が伝記を書く、というほとんど前人未踏の冒険に乗り出した Gaskell のナイーブさが思われる。

#### Works Cited

- Chapple, J.A.V. and Pollard, Arthur, eds. *The Letters of Mrs. Gaskell*. Manchester: Mandolin, 1997.
- Smith, Margaret, ed. *The Letters of Charlotte Brontë*, Vol.II. Oxford: Clarendon, 2000.
- , ed. *The Letters of Charlotte Brontë*, Vol. III. Oxford: Clarendon, 2004.
- Whitehead, Barbara. *Charlotte Brontë and Her 'Dearest Nell'*. Otley: Smith Settle, 1993.
- Barker, Juliet. *The Brontës*. London: Phoenix Giants, 1995.

